

私の作業科学

吉川ひろみ

県立広島大学

教育講演の目的は、初心者のために作業科学をわかりやすく伝えることである。初心者といっても多様なので、初心者であった私が作業科学とどう出会いどう付き合っているかを紹介することで、これから作業科学を学ぼうとする人の参考にしていただきたいと思う。

作業を探究する学問との出会い

作業科学の歴史と私と作業科学との出会いを表1に示した。1989年南カリフォルニア大学に作業科学の博士課程が設置された頃、私は群馬大学医療技術短期大学の助手をしていた。American Journal of Occupational TherapyでOccupational Scienceを知り始めた時¹⁾には、日本の作業療法基礎研究会（現・日本作業療法研究学会）²⁾と似たようなものだろうと思っていた。1992年に留学して、Yerxa³⁾が変数を設定して現象を単純化してとらえようとする見方（oversimplification）は、作業の理解を妨げると言っていて共感もしたが、それまで作業療法に必要なと考えた知識を否定されている気がして不安になった。その

頃 Mosey⁴⁾が、作業療法は医学や心理学など多くの基礎学問の応用科学であり、作業療法固有の基礎学問（作業科学）は不要だという論を展開しており、少なからず私も賛成だった。

1995年の日本作業療法士協会主催の全国研修会で、南カリフォルニア大学からクラーク（Florence Clark）先生とゼムケ（Ruth Zemke）先生が来日し、作業科学のワークショップに参加し、作業科学の基礎が理解できたと思う。それは、作業科学が作業に焦点を当てた学問であるということだ。当時は、人間作業モデルやカナダ作業遂行モデルと並ぶ作業療法理論の一つだと作業科学を考える人もいたので、実践応用を目的として開発された作業療法理論と、固有の学問である作業科学との区別は重要だった。現象学、文化人類学、フェミニズムといったこれまで馴染みのなかった学問の中にある作業の知識を抜き出し発展させることも、作業科学の使命だと理解した。また作業の探究に適した研究方法には、グラウンデッドセオリーやエスノグラフィなど質的研究法があることも理解した。

表1 作業科学との出会い

| 作業科学関連事項 | 年 | 私の作業科学との出会い |
|--|------|-----------------------|
| USC*に作業科学（OS）を学べる大学院が誕生 | 1989 | |
| | 1991 | OSを紹介する論文を読む |
| | 1992 | Yerxa論文、Mosey論文を読む |
| Journal of Occupational Science: Australia**創刊 | 1993 | OSワークショップ参加 |
| 日本作業療法士協会全国研修会テーマ | 1995 | OSセミナー参加開始、翻訳 |
| 第1回OSセミナー（札幌） | 1997 | USCのOSシンポジウム参加 |
| 世界作業科学者研究会設立（米、豪、加・・・） | 1999 | |
| | 2000 | Wilcock講演を聞く、授業名OSへ変更 |
| | 2002 | Kielhofner講演を聞く |
| | 2005 | 大学院OS担当 |
| 日本OS研究会設立、WFOTのOS声明書採択 | 2006 | 世界OSシンクタンク参加 |
| 世界OS研究会（ISOS）設立 | 2007 | 第2回世界OSシンクタンク参加 |

*USC：南カリフォルニア大学 **現在 Journal of Occupational Science

その後は、佐藤剛先生がいらした札幌医科大学で毎年開催された作業科学セミナーに参加し、クラーク、ゼムケ、ウィルコック (Ann Wilcock) という作業科学創始者の講義を聴く機会を得た。印象に残っているのは、ウィルコック先生の「私は作業療法士になって30年間、作業に焦点を当て損なってきた」という言葉だ。本当にそうだった。そして今やっと、作業に焦点を当てて、物事をみたり考えたりする所 (作業科学) ができてきたんだと思った。ウィルコック先生は *Journal of Occupational Science* の創刊者である。

職場の勉強会では、南カリフォルニア大学の大学院での研究や、毎年開催されている作業科学シンポジウムの講演録などを収めた「作業科学」⁹⁾を1章ずつ読んだ。1999年にはロサンゼルスに行き、南カリフォルニア大学の作業科学シンポジウムに参加した。2002年にはストックホルムで開催された世界作業療法士連盟学会のプレワークショップ「作業的公正 (occupational justice)」に参加し、米国以外の各国の作業療法士たちが自分のしていることを臨床実践 (clinical practice) ではなく、社会实践 (social practice) と言うのを聞いた。同じ学会で、キールホフナー (Gary Kielhofner) の講演も聞いた。人間作業モデル発表当初は、作業療法士に作業の知識が必要だと考えていたが、それは誤りで、作業療法士に必要なのは作業の知識ではなく、作業療法モデル (理論) なのだと思われ、拍手喝采を浴びているのを見て、作業科学に対する反発があることを知った。2000年からは大学の作業療法学科1年生の必修科目として「作業科学」を開講し、2005年からは大学院修士課程で「作業科学」を専攻する学生の指導を開始した。

私にとって作業科学との出会いは、作業療法を見直す機会となったが、今の私の作業療法は、作業科学と同時期に出会ったカナダ作業遂行測定 (Canadian Occupational Performance Measure, COPM) や運動とプロセス技能評価 (Assessment of Motor and Process Skills, AMPS) による影響の方が大きい⁹⁾。COPMもAMPSも作業療法の特性を生かした評価法 (作業療法実践の道具) であり、作業科学とは直接関係ない。作業科学に強い関心を示す人の作業療法が、作業に焦点が当たっていないと思うことも多い。

心に残る作業科学文献

1991年に作業科学を紹介する文献¹⁾を読んだ時には、本当にピンとこなかったが、1993年のペニー・リチャードソンのストーリーは興味深かった⁷⁾。これは1992

年の米国作業療法学会のスレーグル講演録であり、内容を拙著で紹介した (pp.79-84)⁸⁾。脳卒中になった大学教授のペニーの人生を研究対象として、エスグラフィという手法を使って行われた作業科学研究である。作業という視点でみていくということ学べたと思う。人を作業的存在 (occupational being) として捉えることを学ぶためには、よい文献だと思う。この研究プロセスはグラウンデッドセオリーとしても紹介されている⁹⁾。

ウィルコックが提唱する、作業は人間の基本ニーズであるという文献には、社会科学研究としての重厚さを感じた¹⁰⁾。人類の進化過程での物作り、産業革命、マルクスが指摘した人間疎外概念が、現代の人間の作業ニーズをとらえる視点を提供するというものだ。人は狩猟や耕作といった作業をすることで生き延び、道具や機械を発明することで、作業の生産性や効率性を高める。楽しみや喜びを表現する芸術などの作業によって、より豊かで充実した人生を送る。これが人間であるから、作業することは人間の基本ニーズなのである。

囚人の作業に関する Whiteford の研究¹¹⁾は、作業がない状況で、人はどのようになり、いかに作業を求めるとかが明らかにされていた。作業がない状況を指す作業剥奪 (occupational deprivation) という概念が打ち出された。

2004年から数年間「作業科学」の授業で使った Pierce の教科書¹²⁾からは、作業の力を十分に知るためには、作業の主観的側面と作業が行われる文脈を考慮する必要性を学ぶことができた。この本を土台にして、作業科学入門書の第2章と第3章を書いた⁸⁾。こうした中で、ライリー (Mary Reilly) の「その気になって考えてやってみれば、もっと健康な自分になれる (man, through the use of his hands as they are energized by mind and will, can influence the state of his own health)」¹³⁾というフレーズが強く心に響くようになっていった。

作業科学における作業の捉え方

南カリフォルニア大学で作業科学を創設させた時、作業は「文化的、個人的に意味を持つ活動の集まりであり、文化の語彙の中で名付けられる」と定義された¹⁾。世界作業科学協会では、作業は「人々が家族の中で、コミュニティと一緒に、個人として毎日することであり、時間を占有し、人生に意味と目的をもたらす」と定義されている¹⁴⁾。原文を表2に示した。

表 2 作業の定義

- chunks of culturally and personally meaningful activity in which humans engage that can be named in the lexicon of the culture (Clark他, 1991)
 集まり 文化的 個人的に 意味をもつ 活動 人が結び付く
 名付けられた 語彙の中で 文化の
- the things people do everyday as individuals, in families and with communities to occupy time and bring meaning and purpose to life (ISOS, 2007)
 こと 人々が する 毎日 個人として 家族の中で コミュニティと一緒に 時間を占有し 持ち込む 意味 と 目的を 生命・生活・人生に

作業科学と作業療法の関係をめぐる議論

Polatajko は、作業科学について次のように述べている (p. 91)¹⁵⁾。作業科学は、人の作業的性質と自分の環境での経験や困難に対して、作業をすることを通してどのように適応していくか、についての研究である。作業科学は、作業的な人間理解のために、どのように多くの理論基盤を統合するかといった思考方法と知識基盤を提供する。作業科学は、作業療法士の作業的知識基盤を作り上げてきた。作業科学は、実践への応用が可能な様々なトピックについての見解やデータを作業療法士に提供し始めている。

Molke は、作業科学と作業療法との関係について大きく 2つの異なる考えがあると指摘している (p. 94)¹⁵⁾。Zemke と Clark⁵⁾は、作業科学は実践で知識をどのように使うかということを考えずに、作業の多面的性質を研究する学問として創造されたが、今後は作業療法の関心事と密接に関連づけて、実践の知識を発達させるべきだと考えている。一方 Mounter¹⁶⁾や Wilcock¹⁷⁾は、作業療法のために作業科学が研究されるという位置付けになれば、作業科学の多くの潜在力が失われてしまうと主張する。この 2つの考えを図 1 に示した。

Molke は、作業科学が作業療法の学問的基盤を確固たるものにするために存在するのか、心理学や社会学のような学問領域としての発展を目指しているのか、そのどちらに焦点を当てるのかについてのコンセンサスがないう状況で否定的に受け止める人がいるかもしれないが、こうした異なる立場からの議論や対話が成長と発達には不可欠だと指摘する¹⁵⁾。

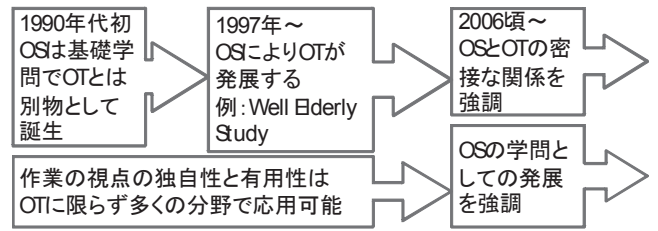


図 1 作業科学と作業療法の関係についての 2つの考え

意味のある作業とは何か

筆者は、作業科学を学ぶ中で、作業の意味をどのように捉えたらよいか、意味のある作業とは何なのか、という疑問をもった。作業の定義に登場する「意味のある (meaningful)」は、具体的にはどのようなものなのだろうと考えていた。松田の修士論文と一緒に作成する中で、障害児をもつ母親が、さまざまな家族の作業をどのように行っているか、その作業から何を得ているのか、何がその作業を行うことを促進するのかを学ぶことができた¹⁸⁾。さらに、筆者自身の博士論文を作成するために読んだ雨宮の著書¹⁹⁾に、さまざまな作業が生き生きと描かれていることを知ったが、その作業の意味をどのように記載したらよいかわからなかった。そこで、作業の意味を考えるための枠組みを開発しようと考えた。作業科学は作業の形態 (form)、機能 (function)、意味 (meaning) を研究する²⁰⁾という記述があることから、作業科学文献には、作業の意味が記載されていると考え、1993 年の創刊から 2008 年までの Journal of Occupational Science 誌の要旨に Occupation と meaning の語がある 50 編を対象に、記載されている作業の意味を抜粋した。その結果、作業の意味は次の 8 側面から捉えることができるという提案をした (表 3)²¹⁾。

表 3 作業の意味を考えるための 8 側面

| |
|-------------------------|
| 1. 引き出される感情 |
| 2. 手段か目的か |
| 3. 人・場所・時間とのつながり |
| 4. 生活習慣との関連 |
| 5. 自分自身 (アイデンティティ) との関連 |
| 6. 健康との関連 |
| 7. 社会の中で意味 |
| 8. 作業の分類 |

ある作業をすることで何らかの感情が引き出されたら、その作業は行為者にとっての意味をもつだろう。楽しいとか嬉しいといった快感情ばかりではなく、悔しいとか悲しいといった不快感情が生じる作業も、意味をもつ。筆者の調査では、自分にとってためになると思う作業（以下、プラス作業）では、快感情が生じる場合もあれば、不快感情が生じる場合もあった²²⁾。

作業は、何か別の目的を達成するための手段（means）になる場合もあるが、その作業をすることそのものが目的（ends）となる場合もある。筋力増強という治療目的を達成するために行う木工は手段にしかないが、木工が好きで作品完成のために作業をする場合は、その木工作业をすることそのものが目的だといえる。

作業をすることで人や時間や場所とのつながりが生まれることがある。子育てや合奏など他者と一緒でなければできない作業もあるし、作成した作品をプレゼントするとか、家族のために家事をするというように、作業が人間関係を形成・維持する媒介となる場合がある。作業するには場所が必要である。場所は物理的制約を加えたり、作業拡大の可能性を保証したりする。情報科学が進んだ現代ではインターネット上に存在するバーチャルな場所もある。また、作業を通して時間のつながりが生まれる。世代を超えて引き継がれる文化行事は、先祖から子孫への絆ともいえる。ある作業が人生に一貫して現れるような場合には、その作業をすることで、自分の過去と現在と将来がつながり、首尾一貫した人生を送ることができるかもしれない。

作業は生活を組織化する力もある。ある作業が日常に習慣として入りこむことにより、リズムのある日常生活が送れるようになる。あるいは、ある作業が既成の生活習慣を崩壊させ、新たな生活習慣を生み出すきっかけとなる場合もある。

人は自分が誰であるかを紹介する場合に、職業をいうことが多い。職業は自分自身のアイデンティティ形成に深く関与する。職業以外にも、熱中する趣味のある人は、その作業により自分を語る場合もある。作業をすること（doing）により、現在の自分が何者であるか（being）が定義される。

世界各国に作業療法が存在し、治療や健康づくりのために作業が使われるという事実は、作業が健康と関連することの証明である。しかし、作業が不適切に行われると健康を害することも知られている。過剰労働によるストレス過多や過労死は、作業が健康に悪影響を及ぼす例である。このように健康との関連で作業の

意味を考えることができる。

作業には、その作業の行為者が考える意味と、その行為者が所属する社会が与える意味がある。その作業を行うことが、所属集団の中での役割を果たすという意味をもつことがある。

作業には、さまざまな分類法があるが、すべての人や状況に共通に役立つ分類はない。しかし、人は作業を語る時に、仕事や遊び、義務や自由など、何らかの Kategorie で表現することがある。どの Kategorie に属するかによって、その作業の意味を表現することがある。

文献

- 1) Clark F, et al. Occupational science: Academic innovation in the service of occupational therapy's future. *American Journal of Occupational Therapy*, 45, 300-310, 1991.
- 2) 日本作業療法研究学会
<http://www.geocities.jp/groundstudyofot/>
- 3) Yerxa EJ: Seeking a relevant, ethical, and realistic way of knowing for occupational therapy. *American Journal of Occupational Therapy* 45: 199-204, 1991.
- 4) Mosey AC: Partition of occupational science and occupational therapy. *Amer J Occup Ther* 46: 851, 1992.
- 5) Zemke R & Clark F (佐藤剛監訳): 作業科学. 三輪書店, 1999 (原著 1996).
- 6) 吉川ひろみ: 作業療法がわかる COPM・AMPS スターティングガイド. 医学書院, 2008.
- 7) Clark F: Occupation embedded in a real life. *American Journal of Occupational Therapy* 47: 1067-1077, 1993.
- 8) 吉川ひろみ: 「作業」って何だろう. 医歯薬出版, 2008.
- 9) Clark F, Ennevor BL, Richardson PL (村井真由美訳): 作業的ストーリーテリングとストーリーメイキングのためのテクニックのグラウンデッドセオリー. Zemke R & Clark F (佐藤剛監訳): 作業科学. 三輪書店, 1999. pp.407-430.
- 10) Wilcock AA: A theory of the human need for occupation. *Journal of Occupational Science: Australia* 1 (1): 17-24, 1993.
- 11) Whiteford G: Occupational deprivation and incarceration. *Journal of Occupational Science: Australia* 4 (3): 126-130, 1997.

- 12) Pierce D: Occupation by Design. FA Davis, Philadelphia, 2003.
- 13) Reilly M: Occupational therapy can be one of the great idea of 20th century medicine. AJOT 16, 1-9, 1962.
- 14) International Society for occupational Science <<http://www.isocsci.org/>>
- 15) Townsend E. Polatajko H (吉川他訳) : 続・作業療法の視点 : 作業を通しての健康と公正. 大学教育出版, 2011 (原著 2007) .
- 16) Mounter C. Illot I: Updating the United Kingdom journey of discovery. Occupational Therapy International 7: 111-120, 2000.
- 17) Wilcock AA: Occupational science: The key to broadening horizons. British Journal of Occupational Therapy 64: 412-416, 2001.
- 18) 松田かほる, 吉川ひろみ : 障害児の母親が捉えた家族の作業. 作業療法 29 : 568-576, 2010.
- 19) 雨宮処凛 : 生き地獄天国—雨宮処凛自伝 . 摩書房 , 2007.
- 20) Larson E. Wood W. Clark F: Occupational science: Building the science and practice of occupation through an academic discipline. In Crepeau, EB, Cohn, ES, and Schell, BAB Ed, Willard & Spackman's Occupational Therapy 10th edition, Lippincott Williams & Wilkins, Philadelphia, 2003, pp. 15-26.
- 21) 吉川ひろみ : 作業の意味を考えるための枠組みの開発. 3(1), 20-28, 2009.
- 22) 吉川ひろみ, 港美雪 : 作業の意味を考える枠組みを用いて検討したプラス作業とマイナス作業の比較. 作業療法 30 : 71-79, 2011.

本稿は、2010年の講演時の資料を基に作成した。